

令和7年度第2回京都市市民参加推進フォーラム会議 次第

日時：令和7年8月6日（水）17時30分～19時40分
場所：京都市役所本庁舎1階 第3会議室

1 開 会

2 議 題

- (1) 次期市民参加推進計画及び地域コミュニティ活性化ビジョン等（以下「次期計画・ビジョン」という）の作成について
 - ア 第1回会議で出された意見等の振り返り、地域コミュニティ活性化推進審議会での意見等の報告（資料2）
 - イ 次期計画・ビジョン（目指す姿、施策の方向性及び重点施策）に係る議論（資料3）
- (2) 市民参加推進計画に係る市民意見を聴く場について（資料4）



京都市市民参加推進フォーラム委員名簿（令和7年8月1日時点）

（敬称略／50音順）

氏 名 （◎：座長、○：副座長）	肩 書 等	委嘱期間
荒木 勇輝	特定非営利活動法人寺子屋プロジェクト（Tera school）代表	R2.4.1～R8.3.31
◎ 乾 明紀	京都橘大学経済学部 教授	H31.4.1～R9.3.31
今里 佳奈子	龍谷大学政策学部 教授	R7.6.1～R9.5.31
岡田 祐樹	京都青年会議所 副理事長	R7.1.1～R8.12.31
○ 白水 育世	一般社団法人マチノミカタ 理事	R4.4.1～R8.3.31
竹田 明子	公益財団法人京都市ユースサービス協会ケア事業担当統括	R6.8.1～R8.7.31
千葉 晃央	京都光華女子大学看護福祉リハビリテーション学部 准教授	R6.8.1～R8.7.31
中嶋 もも花	市民公募委員	R7.4.1～R9.3.31
○ 並木 州太郎	龍谷大学ユネスコソーシャルビジネスリサーチセンター 研究員	R3.4.1～R9.3.31
西澤 純	市民公募委員	R6.4.1～R8.3.31
平井 誠一	株式会社西利 代表取締役社長	R7.4.1～R9.3.31
平野 哲広	京都信用金庫QUESTION 館長	R6.8.1～R8.7.31
松井 順子	藤城学区自治連合会 副会長	R7.6.1～R9.5.31
水本 園乃	市民公募委員	R7.4.1～R9.3.31
森田 明男	市民公募委員	R6.4.1～R8.3.31

本日の会議では、以下のことを目指します。

- ・ 次期計画・ビジョンの「目指す姿」、「施策の方向性」及び「重点施策」（案）の作成に向けた議論・検討

⇒ これまで及び本日の会議並びに地域コミュニティ活性化推進審議会での意見を踏まえて、上記（案）を作成し、次回の会議で確認。

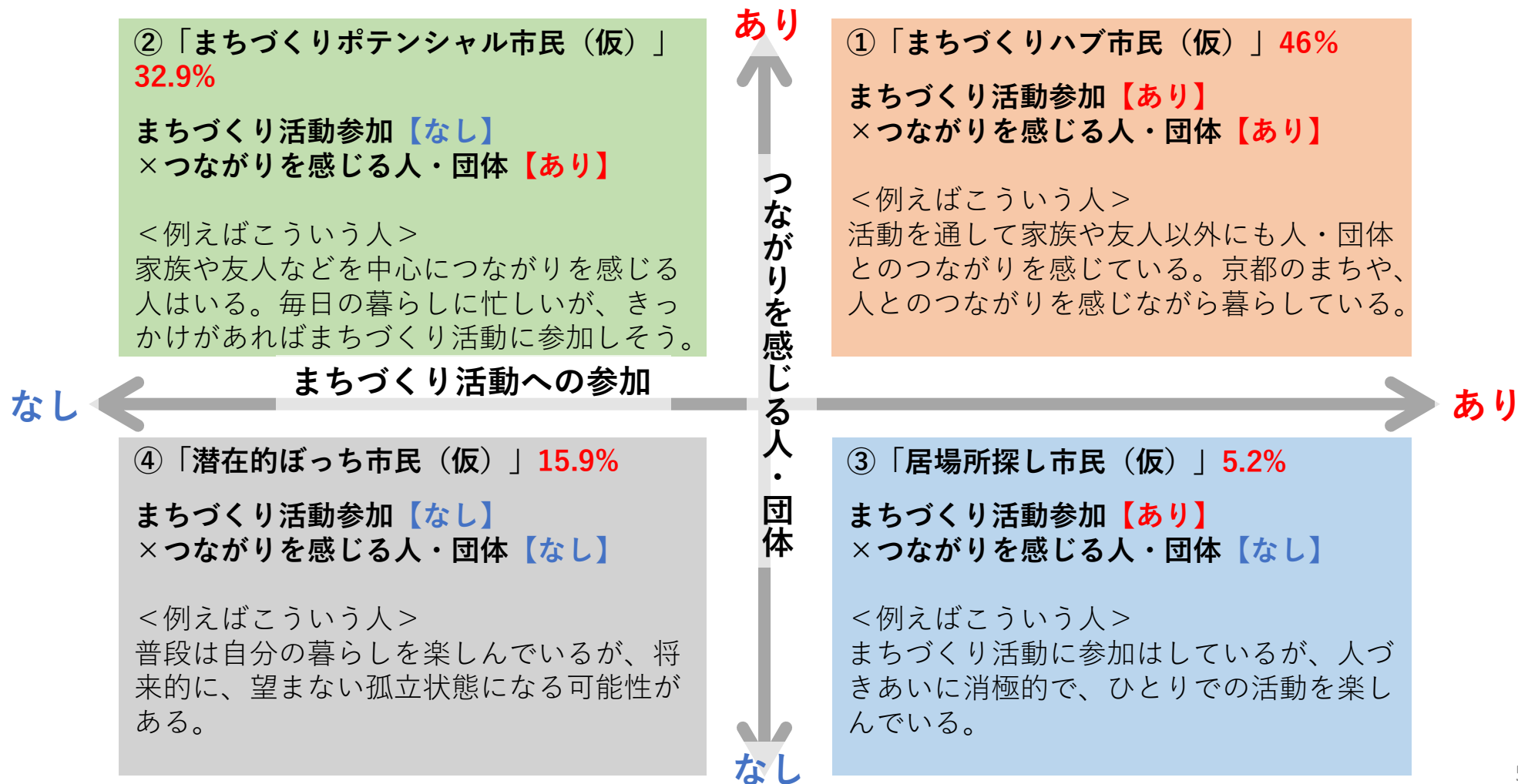
第 1 回会議で出された意見等の振り返り、 地域コミュニティ活性化推進審議会での意見等の報告

【報告】 所要時間：約15分

- ・ 第 1 回会議で出された次期計画・ビジョンの「目指す姿」等に係る意見等の振り返り
- ・ 地域コミュニティ活性化推進審議会での議論内容の報告。

「問1：まちづくり活動参加」と「問16：つながりを感じる人・団体」の回答を、それぞれ「あり」「なし」で分割すると下図の①～④（ペルソナ）に分類できる。

- ・ Q 1：①～④のペルソナの特徴は？それぞれ、どのような暮らしをしているだろうか？具体的なイメージ（人物像）は？
- ・ Q 2：①～④それぞれの人たちにとっての「居場所」と「出番」はどのようなものだろうか？
「居場所」と「出番」を感じられるまちとは、どのような姿だろうか？



第1回会議で出された意見等の振り返り

②「まちづくりポテンシャル市民（仮）」 32.9%

まちづくり活動参加【なし】

×つながりを感じる人・団体【あり】

第1回会議での主な意見

- ・ 京都にゆかりはあるが、参加の機会がない人や仕事で忙しい人（20代・30代の現役世代、子育て世代）等が当てはまる。
- ・ 「参加のみ」、「企画から関わる」といったように、活動への関わり方が選択できれば良い。
- ・ 活動はできないが、知恵やお金を出せる人はいる。

なし

④「潜在的ぼっち市民（仮）」 15.9%

まちづくり活動参加【なし】

×つながりを感じる人・団体【なし】

第1回会議での主な意見

- ・ 親にも頼れないなど、すでに孤立がちになっている人が当てはまる。
- ・ ④から③になり、そこから①になるのではないかな。
- ・ サービスを受ける側にはなっていると考えられ、そこから活動する側として参加してもらいやすいきっかけづくりが重要。
- ・ 多様な関わり方を許容するまちづくりが必要。

あり

つながりを感じる人・団体

なし

①「まちづくりハブ市民（仮）」 46%

まちづくり活動参加【あり】

×つながりを感じる人・団体【あり】

第1回会議での主な意見

- ・ 地元にずっと住んでいる人、友人等と一緒に活動している人が多い。
- ・ 高齢者がメインで若者は少ない。
- ・ PTA経験者が地域活動につながっていくことが多い。
- ・ このペルソナが他のペルソナを誘う「おせっかい」が重要。
- ・ 居住地以外でも活動してもらえればよい。

まちづくり活動への参加

あり

③「居場所探し市民（仮）」 5.2%

まちづくり活動参加【あり】

×つながりを感じる人・団体【なし】

第1回会議での主な意見

- ・ 当番で役をやっている人や仕事で地域と関わる人などが当てはまるのではないかな。
- ・ 自身の「やりたい」が強い人なのではないかな。
- ・ 大学の授業でのフィールドワーク等で活動経験がある学生は多いのではないかな。
- ・ マッチング機能を上手く活用することが重要。

第1回会議で出された意見等の振り返り

◆ 第1回会議での意見

<Aグループ> 乾座長、荒木委員、今里委員、岡田委員、水本委員

- ・ 自分の町内会は活発で、地蔵盆や運動会に参加する人が多く、「①まちづくりハブ市民」が多い。ただ、仕事で忙しい人が増えたり、高齢化で担い手が少なくなっている。
- ・ 昔から地元に住んでいる人や商店をやっている人は「①まちづくりハブ市民」になりやすい。
- ・ 高齢者は「①まちづくりハブ市民」が多く、30代や40代は他のタイプが多いのでは。マンション住民だと、自治会ではなくマンションの管理組合程度であり、夏祭り等を自ら企画するという概念がない。近所でやっているまつり等に参加することで、つながりを感じる機会があるのでは。
- ・ そもそも自治会の概念が薄れており、マンション住民にも自治会に入ってもらうため、条例を作って、不動産業界の人にも協力してもらって呼びかけることをやった。
- ・ 学生と一緒に地域活動をするNPOをやっていたが、何もつながりがない状態で活動に参加する学生は、最初はサービスを受ける側の意識が強い。ただ、続けているうちに主体的に運営に関わるようになり、「①まちづくりハブ市民」になることもあると思う。
- ・ 学生の活動として、大学近くの地域の子どもに勉強を教えるボランティアサークルがあったり、大学には京都科目という京都の伝統文化などを学ぶ科目があったりするが、どちらも結構人気がある。
- ・ 学部や学科に関係なく、京都の大学に、まちづくり活動への参加を必須とする枠があってもよい。自ら手は挙がらなくても、裁判員のように、当たったら参加するのでは。
- ・ 「おせっかい」にネガティブなイメージもあるが、実際は知り合いに誘われて活動に参加することも多い。「越境」を増やすことが重要である。
- ・ 知り合いに誘われて学生が市民公募委員になる例もある。「おせっかい」は大事だと思う。

- ・ NPOをやっているので、「①まちづくりハブ市民」とのつながりがある。そこに「②まちづくりポテンシャル市民」を招き入れられるといい。「③居場所探し市民」や「④潜在的ぼっち市民」はアプローチしにくいと思うが、「①まちづくりハブ市民」にいかに関わりの人を誘ってもらえるかが大きい。また、京都市外に住んでいても、NPOをやっているなど、「①まちづくりハブ市民」に該当する人もいる。
- ・ 人を誘うにあたっては、魅力的な企画やイベントだと誘いやすい。日常的な取組は、1回限りではなく継続して参加するためハードルがあるが、何かひとつでも面白そうな仕掛けを作れると良い。例えば、区役所で簡単に申請できる支援金等があれば、魅力的な企画がもっと増えると思う。
- ・ 「おせっかい」にはネガティブなイメージがあるので、新しい、魅力的なフレーズがあればよい。
- ・ 露骨ではあるが、まちづくり活動に参加すると大学の単位がもらえるなど、学びの仕組に組み込むという観点は重要であり、コンテンツ魅力化のひとつの手段でもある。高校の探究学習とまちづくり活動の連携なども増えているが、まだ一過性のものに留まってしまっており、単位を取ったら終わりではなく、その後も継続して関わってもらうための設計も必要だろう。
- ・ 単位はもらえないが参加してくれる人が一番自発的で、熱意がある。ただ、最近では、若者も忙しく、コスパやタイパを気にするところがある。
- ・ 「②まちづくりポテンシャル市民」は、最初は無理やりでも、続けるうちに自分ごとになるかもしれない。また、まちづくり活動をやっている人たちがカッコよくて参加するという人もいる。「①まちづくりハブ市民」から市民社会を形成していくのが大事だろう。
- ・ まちづくりへの参加も、申請のしやすさ、広告の出しやすさなど、コスパ・タイパ良く取り組めるよう、整備できることはあるだろう。
- ・ 大学生は卒業すると京都を離れる人も多い。恩を受け、返そうという気持ちが湧くことで、少しでも京都に残ってくれる人が増えないか。
- ・ 個人情報保護の問題はあるが、AIなどを活用し、活動と人のマッチングができないか。

第1回会議で出された意見等の振り返り

◆ 第1回会議での意見

<Bグループ> 白水副座長、並木副座長、竹田委員、西澤委員、
平井委員、松井委員

- ・ 賃貸に住んでいる若い人たちは、自治会・町内会に参加する機会がない。現状では、「①まちづくりハブ市民」は自治会・町内会に参加している人がメインではないか。
- ・ 学生は、「③居場所探し市民」又は「④潜在的ぼっち市民」に入るのでは。
- ・ 「②まちづくりポテンシャル市民」は、企業で働いている人など、京都にゆかりはあるが、活動への参加まではしたことがない人ではないか。
- ・ まちづくり活動を学生や若い人はどう捉えているのか。大学生のサークルなど、活動はしているが、まちづくり活動として認識していないケースもあると思う。ただ、アクティブな層は「①まちづくりハブ市民」に入りそう。
- ・ フィールドワークなどを取り入れている学校も多いが、その場合、活動をしているが自主的ではないので、結果として、つながりを感じていないかもしれない。また、自分のやりたい活動をできてはいるが、なかなか共感を得にくい状態の人も、一定数いそう。
- ・ 自分のやりたいことの主張だけでなく、つながりあう機会も重要ではないか。一人暮らしの人などは、若者でも「④潜在的ぼっち市民」にあたる人がいそう。
- ・ 自分は「①まちづくりハブ市民」で、友人も地域活動をしている人たち。ただ、10年後も同じ状態かはわからない。
- ・ 町内会の役員等をしてはいるが、国勢調査などの具体的な活動はできないと断る人もいる。「③居場所探し市民」は、活動してはいるが、強制されている状態で、つながりを感じていない。反対に、学区の卒業生でもある大学生に夏祭りのお手伝いの声掛けをしたら、手を上げてくれた。
- ・ 子どもの卒業後もPTAを続けたいという人や、おやじの会に、おやじ以外の人も参加できるように後援会を立ち上げたら手を挙げてくれた人がいる。これが「②まちづくりポテンシャル市民」から「①まちづくりハブ市民」になった事例といえる。
- ・ 学生は、「②まちづくりポテンシャル市民」から「①まちづくりハブ市民」になるポテンシャルがある。

- ・ 自分はこの中で言う「③居場所探し市民」である。家と職場のエリアが異なり、職場ではまちづくり活動をしているが、住んでいる場所ではしていない。居住地では市民参加できない人もいる。高校や大学の近くや、勤務先での活動も市民参加と言えるのではないか。
- ・ 勤務先でまちの清掃などを行っている人にも、まちづくりに参加しているという気持ちを持てるようにしてあげると良い。参加していることが認識できると、リタイア後も自分の居住地での活動にスライドしやすくなるのではないか。
- ・ ペルソナ設定についても、居住地の活動だけに限らない方がいいのではないか。観光客の中にも暮らすように観光したいという人がいる。例えば、祇園祭でも、自腹で山鉦の曳き手ボランティアをしたいという人もいる。
- ・ 自分は「②まちづくりポテンシャル市民」だと思う。仕事ではまちづくり活動をしているが、地元ではやっていない。気持ちはあるが、多忙で活動できない人もいる。「②まちづくりポテンシャル市民」向けに、それぞれの活動に、「ちょっとお手伝いしたい人枠」を設けるなど、段階的に関わるとよい。
- ・ 「①まちづくりハブ市民」は人脈などを積極的に広げていく力を持っているので、コーディネーターの役割を担ってもらえるといいのではないか。口コミをきっかけに参加するという人も増えているように思う。
- ・ 「④潜在的ぼっち市民」が何を求めているのか、じっくり理解していく必要があり、理解のための場を設計できると良い。市民が何を求めているのか、市民自身が考える機会が必要である。
- ・ 「居場所」は守りで、「出番」は攻めと考えると、住む場所と働く場所が別々な人もいるため、これまでの自治会中心の考え方から、観光客の関わり方も含めて、活動への関わり方が多様になるといいのではないか。
- ・ 体を動かせる人もいれば、体は動かせないがお金なら出せる人もいるなど、参加のかたちは人によって異なる。
- ・ 「④潜在的ぼっち市民」に向かっている人たちを「①まちづくりハブ市民」になれるよう誘導するのであれば、色々な人が活躍できる、交わるような「居場所」や「出番」があるといいのではないか。
- ・ 学生はスマホを通じてつながる方がリアリティのある世代かもしれない。

◆ 全体像

＜参考＞ 第1回会議資料
(再掲)

地域の現状と課題のまとめ

市民 の状況 (地域住民、学生、企業など)	市民 と まちづくり活動 の関係	まちづくり活動 の状況 (自治会等の活動など)
・ まちづくり活動との接点がない。 (忙しい、興味・関心が低い、知る機会がない等) ・ 参加したくても参加できない。 (どこに相談すればいいかわからない。) ・ 主体的に関われないと続かない。	・ 市民とまちづくり活動の間のギャップ (やらされ感、市民の本音や主体性が出せない・引き出せていない・・・) ・ 思いをつなぐ人がいない ・ 昔ながらのやり方が強制される ・ 役割や当番はきっかけになるが、それだけでは続かない	・ 担い手がない ・ 参加者の固定化、活動マンネリ化 ・ 主体同士のネットワークがない ・ 役割・当番・使命感で運用 ・ 引継ぎ優先で見直し機運が生まれづらい ・ 新しい取組(デジタル化など)が進みづらい



両部会の議論を踏まえた取組の方向性

- まちづくり活動参加へのきっかけや入口を増やしていくには、住民の興味関心や思い等をベースに、まちづくり活動に関わりやすい形を地域の中で増やしていくことが重要。
⇒「まちづくり活動の見える化・魅せる化」、「気軽に参加できる機会の創出」など
- 持続的・主体的にまちづくり活動に関わっていくには、当番や決まった役割の人だけではなく、多様な人の話し合いの下、活動している・したい主体が、主体性を発揮しやすい環境への整備(活動のアップデート)が重要。
⇒「主体的に関わりやすい機会の創出」、「多様な主体の交ざり合い、対話や連携・協働の推進」など
- 異なる活動主体同士の連携・協働には、行政や中間支援者など、媒介者の役割が重要。
⇒「活動や主体間をつなぐコーディネート人材の育成やネットワーク化」など

◆ 今後の方向性①（まちづくり活動への参加促進の視点）

<目指す方向性>

身近な地域でのまちづくり活動に住民をはじめ、多様な主体が参加したくなる、思いがけず参加してしまう仕掛けが、暮らしの延長線上に多くあり、住民等がまちづくり活動に関わり、緩やかにつながる中で、居場所や出番が生まれていくことを目指す。

取組の方向性と施策イメージ

<まちづくり活動の見える化、魅せる化の推進>

身近な地域でのまちづくり活動への参加につながるよう、SNS活用など活動のビジュアル化やデジタル化（支援）も含め、参加の入口の見える化や個に届く情報発信を推進します。

<気軽に参加できる機会の創出支援>

身近な公共空間等において、気軽に参加できる機会や場づくりを進めます。

地縁に加え、学び縁や趣味縁をきっかけにした興味関心から始まる参加や、時間や場所に縛られずイベントだけ参加やオンラインでの参加など、多様な参加機会の創出を支援します。

<主体的に関わりやすい機会の創出支援>

子どもから高齢者まで幅広い世代の住民や地域企業や大学など多様な主体が、それぞれが持つ得意分野や専門性を活かすなど、地域の中で主体的に関わりやすい機会の創出を支援します。

人が持つ「わくわく」や「もやもや」など、表出されていない手前の感情を引き出す場づくりを進めます。

<地域活動への参加促進>

誰もが住みよく、安心・安全に暮らせる地域社会の実現につながる、防災や防犯、高齢者や児童の見守り、環境美化など地域活動が引き続き行われるよう自治会・町内会への加入促進や各種啓発に取り組みます。

◆ 今後の方向性②（持続可能な活動へのアップデートの視点）

< 目指す方向性 >

地縁団体をはじめ、市民活動団体、地域企業、大学、福祉団体等、多様な主体の連携・協働を促進し、それぞれが強みや特性を発揮することで、まちづくり活動への関わり方をアップデートや新たな行動を生み出すことを目指す。

取組の方向性と施策イメージ

< デジタルツールの活用促進 >

デジタルツール活用支援による、情報共有の迅速化、負担軽減など、情報発信手段の多様化を支援します。

< 多様な主体の交ざり合い、対話や連携・協働の推進 >

地域の中で視点や得意分野の異なる多様な主体との連携や対話を進めながら、自分たちの地域の課題や特性を把握し、地域の将来像づくりや課題の洗い出し、活動の見直しに向けて取り組めるよう支援します。

< 主体間をつなぐコーディネート人材の育成、ネットワーク化 >

活動に参加した住民等が交流や対話を通じて、お互いを知り、共に活動を進めることができるよう、主体間をつなぐコーディネート人材づくりや、主体間の交流・ネットワークづくりを進めます。

< 行政協力業務のアップデート >

行政からの依頼事務の担い手としての機能の負担軽減に取り組むとともに、時代に即した在り方を検討します。

地域コミュニティ活性化推進審議会(令和7年7月7日開催)における主な意見

現状・課題に関するご意見

- 自治会加入率の減少など、身近な地域コミュニティは厳しい状況。ＩＣＴの活用をはじめ、アップデートが必要。
- 元学区の誇りと使命感で頑張っている方はいるが厳しい状況。まずは、皆が住みやすいまちのことを考えてから、コミュニティのことを考える方が良い。
- 学区単位ぐらいの現場感で大切にしたいことや何に特化して取り組んでいくか考えることも必要。

これまでの議論のまとめ、方向性に関するご意見

- 審議会での話し合いは、2つの方向性にうまくまとまっている。
- 行政の縦割りで別々に進めるのではなく、区H u bとして一体として取り組むことは理想的。
- 市が目指す理念が、区の職員まで、また学区レベルから自治会レベルまで地域に浸透させてほしい。
- 市民に近い区が取組が重要。計画の統合と同時に、各区独自のまちづくり運営方針をしっかりと策定してほしい。
- 10年後、地域コミュニティでの取組が最先端と言われているかもしれない。コミュニティ持続に向けた支援策を引き続き検討したい。

区、区H u bに期待するご意見

- 自治会等が内部から変えていくには難しい面もあり、サポートする人が必要で、区や区H u bに期待したい。
- 区の職員には、地域に多く出てもらって、地域で活動したい人を見つけた時には全力で応援してほしい。
- 地域には何が大事なのか、解決しないといけないのかなど、職員が地域と向き合う時間をつくっていただきたい。
- 有機的なつながりやイノベーションのためには、単に情報やアンケートをとるだけでなく、例えば「災害時に流通が途絶えたときにどうするのか」という問いを投げ掛けることで、必要なことや「私はこんなことで力になれるよ」という声が拾えるので、区H u bではそういったところを意識して頑張してほしい。
- 地域と行政の間に入り、橋渡し役となる団体や人を地域から集めてほしい。
- 区と市、区内、住民同士の3つのつながり、連携が重要。予算、政策、様々な知恵まで、コーディネートいただきたい。
- 京都らしさを失わずに、まちが元気になる市民参加を実現できるよう進めてほしい。

【報告】 所要時間：約10分

- ・ 次期計画・ビジョンの策定に向けた本日の議論内容の共有。

◆ 次期計画・ビジョンの形態

次期市民参加推進計画は、地域コミュニティ活性化ビジョン及び区基本計画の通底部分等と統合することを踏まえ、市内一律に施策を進めるだけでなく、地域ごとの様々な状況に応じて柔軟に対応できるよう、「ビジョン」という形にし、政策の方向性を示すものとしたい。

◆ 次期計画・ビジョンに係るフォーラムからの答申

現行計画策定時には、フォーラムから本市に対して、計画に盛り込むべき内容について提言書を提出していたが、次期計画・ビジョンは2つの審議会に対して諮問がなされていることを踏まえ、両審議会から同じ内容の答申をいただく趣旨で、「提言」という形を採らず、それぞれの審議会での議論内容を盛り込んだ次期計画・ビジョン（案）自体の答申としたい。

◆ 次期計画・ビジョンの成果指標

成果指標について、昨年度のフォーラム会議では、施策ごとに設定するという趣旨の意見も出ていたが、次期計画・ビジョンは、政策の方向性を示す「ビジョン」とすることを踏まえたアウトカム指標を設定することとしたい。

次期計画・ビジョンの全体像（章立て等）について

◆ 次期計画・ビジョンの全体像（章立て等）（案）

第1章 基本的事項

- ・ 目的・趣旨
- ・ 位置付け
- ・ 計画・ビジョンの期間

第2章 前期計画・ビジョンの総括

- ・ 取組状況
- ・ 成果と課題
- ・ 社会情勢の変化

第3章 目指す姿

第4章 施策の方向性及び推進例

- ・ 市政参加
- ・ 市民のまちづくり活動

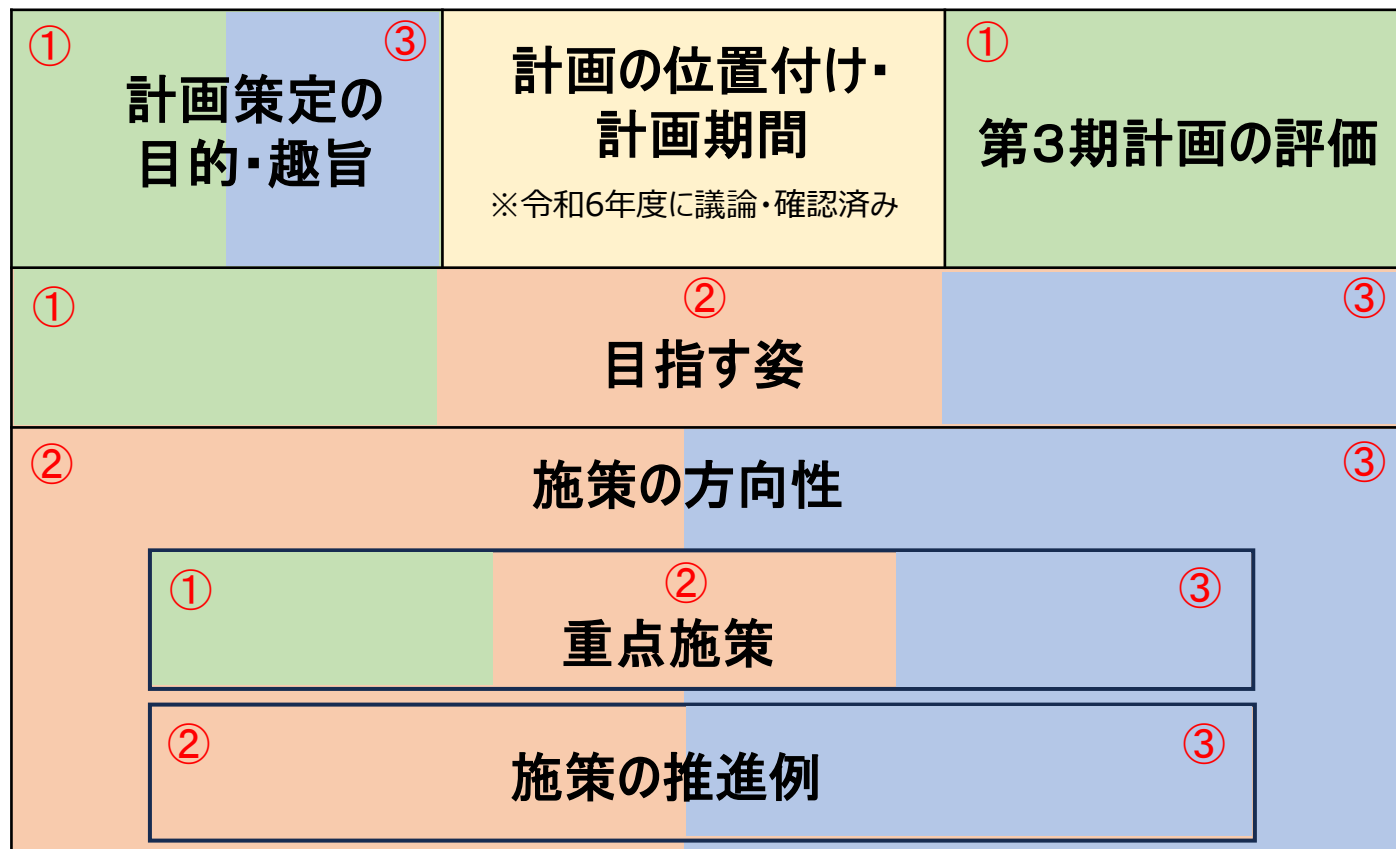
第5章 推進体制

- ・ 市役所・区役所の推進体制
- ・ 区役所の果たす役割

資料集

- ・ 基本データ
- ・ アンケート結果・分析

【次期計画・ビジョンのフォーマットイメージ（未決定）】



【議論・確認等の主な時期】



…第1回会議（7月）

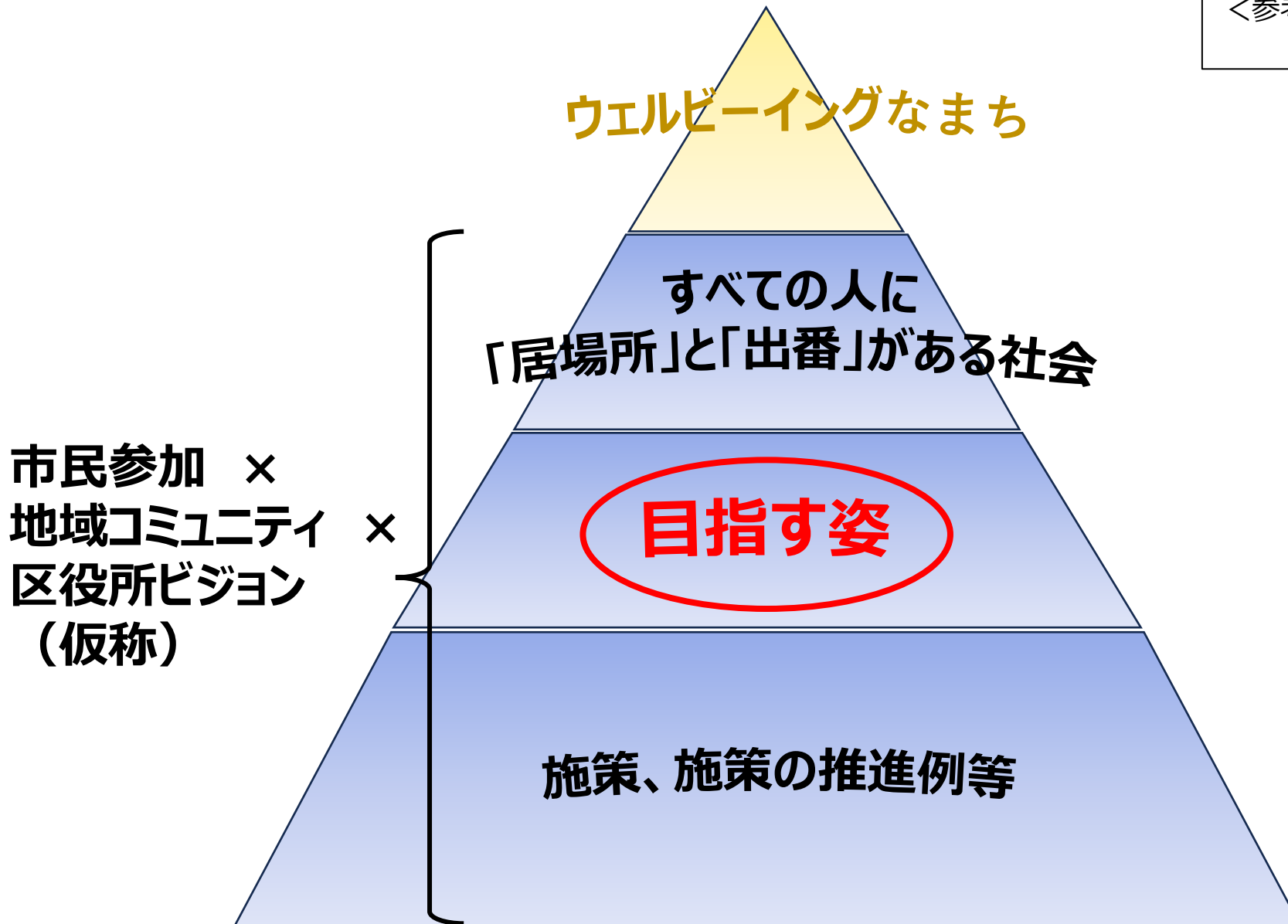


…第2回会議（8月）



…第3回会議（9月予定）

＜参考＞ 第1回会議資料
(再掲)



目的：次期計画・ビジョンの「目指す姿」、「施策」について検討する

検討のポイント

1. 「目指す姿」に盛り込みたい内容、キーワードは？
2. 次期計画・ビジョンの構成を踏まえた上で、
1の「目指す姿」を実現するために必要な「施策」は？

進め方（75分）：

- 1 グループ対話①（25分）：
次期計画・ビジョンの「目指す姿」に盛り込みたい内容は？
- 2 グループ対話①の共有（5分）
- 3 グループ対話②（25分）：
グループ対話①で話した「目指す姿」を実現するためにはどのような「施策」が必要か？
- 4 グループ対話②の共有（5分）
- 5 全体対話（15分）：
グループ対話を踏まえた、次期計画・ビジョンにおける「目指す姿」、「施策」は？

⇒ 本日の議論を踏まえ、事務局において「目指す姿」、「施策の方向性」（案）を作成。

次期計画・ビジョンの「目指す姿」、「施策」について

＜参考＞ A I による「目指す姿」の案を参考に、大事にしたいキーワードを検討したり、反対にこの中にはないが盛り込みたい内容を検討してみてください。

1. 多様な人々が「参加しやすさ」と「楽しさ」を感じ、まちづくり活動へ主体的に関わることで、日常生活の延長線上で新たなつながりや学びが生まれている。

＜解説＞

まちづくり活動への多様な市民の参加促進、その活動の魅せる化や、人とのつながりが自然に生まれる仕組み、そして学びの機会の創出という要素を統合しています。特に、「おせっかい」のようなポジティブな声かけが新たなつながりを生むきっかけとなるという考え方も含んでいる。

2. 全ての市民が安心して充実した生活を送り、個性や強みを活かし、互いに支え合う、孤立・孤独がない包摂的な社会が実現されている。

＜解説＞

地域コミュニティが目指す普遍的な姿として、市民一人ひとりが安心して暮らせ、それぞれの個性や強みが尊重され、相互に支え合い、孤立することなく社会全体で包摂される状態を表現している。

3. ICT活用で効率化・負担軽減された持続可能なまちづくり活動が確立され、京都の「学芸」の強みを活かし、地域コミュニティとして次世代の多様な担い手が育まれている。

＜解説＞

まちづくり活動の現代化と持続可能性に焦点を当てています。ICTツールの導入による効率化と負担軽減が、活動の継続性を支える基盤となり、同時に、京都の特性である「学芸」の強みを活かして、若者を含む多様な世代がまちづくり活動の新たな担い手として育成される未来を目指す。

4. 市民が自ら社会課題を「見える化」し、多様な主体が「対等な立場」で連携・協働し、行政や専門家の支援を得て、複雑な課題が継続的に解決されている。

＜解説＞

社会課題の発見から解決までのプロセスにおける市民と多様な主体の協働を強調しています。市民が主体的に課題を特定し、NPO、企業、大学、福祉団体、行政といった様々な主体がそれぞれの専門性や強みを生かして、対等な立場で連携・協働し、複雑な課題解決に継続的に取り組む姿を描いています。行政や専門家がその過程を支援する役割も含まれる。

5. 区役所・支所が市民にとって最も身近な行政機関として、地域の実情に応じた「参加と協働のきっかけづくり」と「橋渡し役」機能を強化し、地域全体の活力を高めている。

＜解説＞

区役所・支所が市民とまちづくり活動をつなぐ「結節点」としての役割を果たすことを明確にしています。地域の実情に応じたきめ細やかなサポートを通じて、市民のまちづくり活動への参加を促し、多様な主体の連携を支援することで、地域全体の活力を高めることを目指す。

※ A I による「目指す姿」を作成するに当たって、現行市民参加推進計画、第1回市民参加推進フォーラム会議の議論、現行地域コミュニティ活性化ビジョン、地域コミュニティ活性化推進審議会での議論及び新京都戦略並びに京都基本構想案を読み込ませたうえ、作成を実施。（新京都戦略、京都基本構想案は、市民参加に関する部分を参照するよう命令）

【グループディスカッション】

< 1 回目 >

グループ A

白水副座長（オンライン）、
荒木委員（オンライン）、
竹田委員（オンライン）、
水本委員（オンライン）、
千葉委員、中嶋委員

グループ B

並木副座長、今里委員、
西澤委員、平井委員、平野委員

< 2 回目 >

グループ A

白水副座長（オンライン）、
荒木委員（オンライン）、
竹田委員（オンライン）、
水本委員（オンライン）、
今里委員、西澤委員

グループ B

並木副座長、千葉委員、
中嶋委員、平井委員、平野委員

※乾座長は、グループには入らず、全体のとりまとめ役

1. グループ対話①（25分）

次期計画・ビジョンの「目指す姿」に盛り込みたい内容は？

2. グループ対話①の共有（5分）

次期計画・ビジョンの「目指す姿」に盛り込みたい内容は？

3. グループ対話②（25分）

グループ対話①で話した「目指す姿」を実現するためにはどのような「施策」が必要か？

4. グループ対話②の共有（5分）

グループ対話①で話した「目指す姿」を実現するためにはどのような「施策」が必要か？

5. 全体対話（15分）

グループ対話を踏まえた、次期計画・ビジョンにおける「目指す姿」、「施策」は？

【議論】 所要時間：約15分

- ・ 市民参加推進計画に係る市民意見を聴く場について、議論・検討を行う。
 - ⇒ 市民意見を聴く場での投げかける問いを決定する。

市民参加推進計画に係る市民意見を聴く場について

◆ 趣旨・目的

市民参加推進計画を策定するに当たり、多様な市民の意見を計画策定に活かすため、フォーラム委員自らが、現に市政参加やまちづくり活動を行っている市民の意見を聴くことを目的に開催。
(これまでから、市民参加推進計画策定時に開催)

◆ 日時

未定（9月又は10月に開催）※60分程度

◆ 場所

未定（京都市役所周辺を想定）

◆ 内容

- ・ 市民意見を聞く場と「地域コミュニティ×市民参加」をテーマとした市民対話会議（市長と市民が対話し、そこで出た意見・議論を本市の取組に活かす。）を同時実施し、まちづくり活動のプレイヤー等の意見を聴取する。
- ・ 終了後、市民活動をしているプレイヤーの交流会を実施する。
- ・ 同日に、フォーラム会議を実施し、意見聴取で感じたことをそのまますぐ議論に活かす。

◆ 参加者（想定）

- ・ 市民参加推進フォーラム委員
- ・ まちづくり活動のプレイヤー
- ・ 京都市長
- ・ 京都市職員（文化市民局地域自治推進室、各区役所など）

※ 人数規模は会場のキャパシティによる

◆ タイムスケジュール

- ① 市民参加推進フォーラム会議（第１部）【４５分】
※前回会議を受けて、事務局でとりまとめた案の報告等
- ② 市民意見を聴く場（兼市民対話会議）【６０分】
※市民意見を聴く場を市民対話会議としても位置付けて実施
※対話のテーマは「地域コミュニティ×市民参加」
- ③ 参加者同士の交流会【６０分】
※交流会自体は１２０分程度の予定であるが、フォーラム委員は冒頭６０分のみ参加
- ④ 市民参加推進フォーラム会議（第２部）【９０分】
※市民意見を聴く場及び交流会で聴取した意見を踏まえ、計画策定に向けた議論を実施

◆ 市民意見を聴く場（兼市民対話会議）の運営方法

- ① 市民活動をしているプレーヤーや京都市長をはじめ、その場にいる人が、フィッシュボウル方式（詳細は次ページ）でテーマに沿った対話を実施。（フォーラム委員が対話に加わることも妨げない）
- ② 1テーマ約30分で、2つの問いで対話を実施することを想定
※当日の対話の盛り上がりより、問いが1つのみになったり、3つ以上になることも妨げない

市民参加推進計画に係る市民意見を聴く場について

＜参考＞ フィッシュボウル方式

- 準備
- 空間の中心に、2から10のイスを円を描くように配置し、その内側の円を囲むように、外側のイスを幾重かの円弧にして並べる。
 - 内側の円に座る人が対話し、その対話を外側に座る人が聴く。**
- 進行
- 最初に対話する人が内側の円に座る。**
 - 内側の円で行われる対話はファシリテーターによって進められ、外側の人たちはその対話を聞きながら自身の意見を深めていく。
 - 内側の円の中に1つの空席を用意しておき、誰か話したくなった人が、外側の円から内側の円に移動することができる。**
 - 誰かひとりが内側の空席に座ったら、代わりにひとりが外側出て、内側の円に1つの空席を作る。**

